OPIデータにみる日本語学習者と日本語母語話者による文末表現の使用
―接続助詞で終わる言いさし表現を中心に―

朴　仙花

キーワード　*接続助詞、言いさし表現、OPI、話し言葉コーパス、習得レベル*

1. はじめに

本稿は、日本語の話しことばにおける日本語学習者と日本語母語話者による文末表現の使用状況を調査したものである。日本語の文末表現には、「話し手と聞き手の関係、聞き手との情報の共有関係、聞き手へどう働きかけるかなどの聞き手への態度などが含まれている」（峯1995：65）ため、文末表現は「待遇上の積極的な意味を持っている」（岡田1991：12）。日本語の会話における文末表現の種類は様々あるが、特に、文末あるいは発話末に「けど」「から」「ので」などの接続助詞で終わる表現が多用されることが従来の研究で指摘されている（岡田1991：９、水谷2001：97、白川2008a：１）。そして、学習者にとっては、命題だけの表現の習得よりも、このような文末表現を適切に使用することの方が難しいということも指摘されている（池田1995：128－129、水谷2001：106）。

本稿では、日本語の文末表現の中から、文末が言語化されず接続助詞で終わる文末表現（以下、言いさし表現）を考察対象として取り上げることにする。これまでの研究は、言いさし表現そのものの談話機能やポライトネスの観点からの考察に留まるものがほとんどであり、学習者による文末表現の習得を扱った研究は峯（1995）、鮫島（1998）とまだ少ない。さらに母語や習得レベルの異なる学習者の文末表現の使用状況を、実際の発話データを通して母語話者と比較考察した研究も決して多いとは言えないのが現状である。

また、コミュニケーションを重視する傾向になりつつある日本語教育の現場では、言いさし表現を独立した学習項目として取り上げている例が増えているのも事実である。しかし、日常会話での使用頻度が極めて高いことを考えれば、「言いさし表現の指導はまだ不十分である」（成田2004：84）と言わざるをえない。

そこで、本稿では、自然発話資料である学習者コーパス（KYコーパス）[1]と

母語話者コーパス（上村コーパス）[2]の二つのOral Proficiency Interview（OPI）[3]データを用いて比較調査を行い、日本語学習者の接続助詞で終わる言いさし表現の使用状況を明らかにする。

2. 言いさし表現の定義

「言いさし表現」という用語の定義は、研究者によって各々微妙に異なり、今のところまだ定まっていないが、本稿でいう言いさし表現とは次のような発話のことをいう[4]。

1） 発話文の形式上、文を最後まで言い切らず複文の主節が省略されている発話である。

2） 文を最後まで言い切っていないのにもかかわらず、情報伝達においては完全文と同じ発話機能を果たしている発話である。

上記の条件を満たす言いさし表現にはいくつかの種類が挙げられるが、本稿ではそのうち接続助詞で終わる言いさし表現を考察対象とする。

3. 先行研究及び本稿の研究課題

3. 1　先行研究

ここではまず本稿と関連の深い先行研究のレビューを行い、次いで本稿で取り組むべき課題について述べる。日本語学習者の習得を扱った研究には、ポライトネスの観点から学習者による文末の「けど」の使用を分析した石川（2005）と学習者の文末表現の習得研究を行った峯（1995）、鮫島（1998）などが見られる。

石川（2005）は、OPIデータをもとに、ポライトネスの観点から日本語学習者と日本語母語話者の文末表現の「けど」を分析した研究である。

石川では、まず、文末表現の「けど」は話し手の心的態度を表し、その心的態度は様々な理由による「困惑」と「ためらい」の二つに集約されるとしている。さらに学習者の発話について考察を行った結果、学習者の能力が上級、超級と向上するに従い、文末の「けど」の使用状況が日本語母語話者に近づき、意見や感情を述べる際や聞き手の意見を否定する際に、話し手のためらいを示すなどの心的態度を表出する例が多くなっていることが報告されている。一方、「日本語能力が低い者は、充分に文末表現「けど」が表すポライトネスを理

解し、自由に会話に応用して使用するレベルに達していない」（p.359）という。超級話者に比べ、日本語能力の低い者はまだ充分に文末表現「けど」を理解していない理由として石川は、「文末表現「けど」等の研究がまだ充分とは言えない」こと、「日本語教育の中でこのような表現に関する指導法が充分に確立されていないことがあげられる」（p.360）と述べている。そして最後に、「会話において、このような表現が果す役割は小さくなく、さらなる研究と日本語教育の中での指導法が検討されることが必要であろう」（同上）と唱えている。

学習者の文末表現の習得過程を考察した峯（1995）は、日本語学習者（筑波大学留学生25名）との８ヶ月間（１回／月）の対話資料をもとに、学習者の文末表現の習得過程に関して考察を行った。その結果、接続助詞等で文末を省略するような表現は「初期の段階から出現し、言語レベルとともに次第に表現形式が増える」（p.68）現象が見られたという。文末の「けど」に関しては、「習得の際に使用回数が増え，汎用の時期を通り、誤用を犯し、また使用回数が減少し誤用も減る」（p.69）と述べている。

鮫島（1998）は、初級後期･中級前期･中級後期の中国語話者を対象に談話完成テストを実施し、「依頼」「断り」「謝罪」の発話行為の中でどのような文末表現が使用されているのか実証した。

鮫島によると、学習者はレベルが上がるにつれて、①依頼形では「～てください」という表現形式が漸減し、「～んですけど／～んですが」のような間接的な依頼形が漸増していることが観察され、②断り形では言い切りの文末形式が漸減し、「～ので／～から／～て」による理由・説明の表現形式が明示化し、「～けど／～が」を使用し「断り」を和らげようとする傾向が見られたという。全体的に、学習者はレベルが上がるほど母語話者の文末表現へ接近して行く過程が観察できた（p.83）と報告されている。

このように、言いさし表現に関する研究は盛んに行われてきたが、自然発話における学習者の言いさし表現の使用状況に関する考察はまだ十分とは言い難く、また従来の研究成果が日本語教育の現場にも有効に反映されているとは言えないのが現状である。

3．2　研究課題

日本語学習者は、日本語の文法知識を持っていても、それを実際のコミュニケーションに応用できる能力を備えているとは限らない。そのため言いさし表現の応用を含めたコミュニケーション能力を育成するために必要なものは何かを考える必要がある。

小林（2005）では、これまでの文法シラバスが、実際のコミュニケーション

での頻度や用法といかにかけ離れていたかを指摘し、これからの方向性を示した。小林は、「言いさし」「話の切り出し」「言いよどみ」といった、話しことばに必要な表現が教科書や練習問題に盛り込まれるようになってきたが、「それらは、文法項目を教えるために付随的に取り入れられているだけであり、話しことば教育のシラバスとして、体系的に整理されているわけではない」（p.39）という現状の問題点を追及した。その上、「このような現状を改善し、効果的な教育を行うためには「教え方」を工夫するだけでなく、「教える内容」について抜本的に見直すことが必要である」（同上）と指摘した。

小林（2005）においても述べられているように、日本語の会話において言いさし表現は必要不可欠なものであり、コミュニケーション能力を向上する上でも欠かせない表現の一つである。

以上の小林の指摘を踏まえ、言いさし表現を如何に教材に取り込むべきか、如何なる教授法が有効なのかを探るための第一歩として、学習者がどのくらいの頻度でどのような表現を使用しているのかという実態を把握する必要性があると本稿では考える。そして、言いさし表現の使用状況に関する量的考察を本稿の課題として取り上げる。具体的な研究課題としては以下の３つを挙げる。

Ⅰ．初級から超級までの習得レベルの相違による、言いさし表現の表現形式及びその使用頻度に相違点がみられるかを探る。
Ⅱ．各々の接続助詞の習得順序が見出せるかを探る。
Ⅲ．学習者の母語の相違による、言いさし表現の表現形式及びその使用頻度に違いがみられるかを探る。

4．本稿で用いるコーパス

学習者による言いさし表現の使用状況を見るためには、当然ながら自然産出に近い発話データを分析することが望ましい。また、学習者の使用実態をより明確に把握するためには、母語話者と比較を行いその相違を明らかにすることも有効なアプローチであろう。比較を行う分析データを選定するにあたって、そのような点を考慮し、なるべく同じ手法をもとに採取された近い性質を有する二つのコーパスを用いることが分析に適していると考えられる。そこで、本稿では、現在利用できる話し言葉コーパスの中から、形式及びデータの構成などの面で統一性が保たれているＫＹコーパス（学習者コーパス）と上村コーパス（母語話者コーパス）の二つを用いることにした。

以下、まずKYコーパス、上村コーパスの特徴について述べ、それからデータの処理手順、抽出手順について説明する。

4．1　学習者コーパス－KYコーパス

KYコーパスは、「日本語学習者の自然で、かつ、標準化された能力判定がつき、また横断研究を行うのに十分な量のデータ」（鎌田2006：43）が不足していたという日本語の第二言語習得における問題を打開するために作成された学習者コーパスである。このコーパスには英語、中国語、韓国語を母語とする日本語学習者それぞれ30名（初級５名、中級10名、上級10名、超級５名）、計90名分の発話データが収録されている。

KYコーパスは、近年の日本語教育研究において学習者の習得研究を行う際に頻繁に用いられている。それを利用する利点として次の３点が挙げられる。

⑴　各被験者の能力レベルが明示されている。
⑵　インタビューの構成がしっかりしているため、データ間の比較が容易である。
⑶　発話単位の認定が比較的容易であり、数量化・定量化を行いやすい。

以上のことから、KYコーパスは学習者の言語能力を示す自然な発話資料であると同時に学習レベルによる相違を探るのに適した資料であると判断した。

4．2　母語話者コーパス－上村コーパス

上村コーパスは、OPIテスター（有資格者）が日本語母語話者（54人）、非母語話者（56人）計120人に行ったおよそ15分間の日本語OPIの文字化テキストを収録したもので、インターネットで一般公開されている[5]。本稿で扱うのはその中の母語話者50人の発話データである。

4．3　データの処理、抽出手順

データの分析に先立ち、KYコーパス、上村コーパスのそれぞれのデータを以下の手順で絞り込んだ。

4．3．1　KYコーパスのデータの絞込みについて

データの絞込みの際に、タグ付きKYコーパスの検索のために開発された専用ツールであるE－KWIC[6]を用いた。次に具体的な検索手順を以下に示す。

a）まず、従属節か主節（文末）かを問わず、学習者のレベル別、母語別に使

用される接続助詞の抽出を行った。

b）検索a）の絞込みデータから、学習者のレベル別、母語別に現れた接続助詞の種類とその使用頻度をそれぞれ算出し、使用上位項目を選別し、集計を行った。

c）操作b）で選別した使用上位項目について、b）と同じ手順でそれぞれ検索をかけ、学習レベル別、母語別に使用された各接続助詞について集計を行った。

4. 3. 2　上村コーパスのデータの絞込みについて

上村コーパスについて以下の手順でデータの抽出と絞り込みを行った。

1）上村コーパスから「2（インタビューを受ける母語話者）」で始まる文字列を抽出し、母語話者データを生成した。

2）「茶筌」[7]を用いて母語話者データに対し、形態素解析を行い、品詞情報を付与した。

3）　タグ付けされたデータの中から接続助詞を抽出し[8]、一覧表を作成した。もとのデータを参照し、接続助詞の使用位置を発話中（従属節）、発話末（主節）別に集計を行った。

5. 調査結果及び考察

5. 1　課題1－習得レベルによる比較

まず、接続助詞の発話位置、言いさし表現に現れる使用上位項目及びその使用頻度について、習得レベル別に比較を行った。

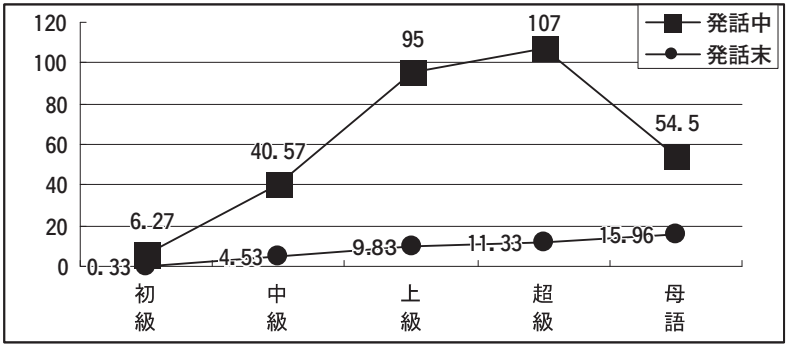
5. 1. 1　接続助詞の発話位置による比較

会話において接続助詞は、「発話中」と「発話末」の二つの位置に現れる。本稿でいう「発話中」とは、接続助詞の後に句点等がおかれ、さらに発話が続く場合をさす。「発話中」に用いられる場合、接続助詞は本来の節と節を接続する働きをする。「発話末」とは、発話の終わりに接続助詞が使われた場合、すなわち言いさし表現のことをいう。

接続助詞全体の使用実態を見るために、接続助詞が現れた位置が「発話中」か「発話末」かという相違に着目し、学習者の習得レベル別の使用状況と日本語母語話者の使用状況を**図1**にまとめた。**図1**における「発話末」には、接続助詞に終助詞が後続した場合の発話、また、接続助詞で発話が終わった後に「う

ん、ええ」などのフィラーが後続しただけで、そこから話が続かない場合の発話も含まれる。なお、学習者のレベル別の被験者数が異なるために集団別の平等な比較が難しく、使用総数を単純に比べることは意味を持たないと考えられる。そこで一人当たりにおける使用回数の平均数をもって比較を行うことにした。

図１　発話位置による比較



上の**図１**から分かるように、発話中、発話末ともに学習者による平均使用数は、習得レベルが高くなるに従い同じように上昇する傾向が見られる。しかし、日本語母語話者と比較すると、発話中、発話末には少し異なる特徴が見られる。

まず、発話中の場合、日本語母語話者の平均使用数（54.50）は、超級学習者（107.00）、上級学習者（95.00）の約半分に相当する。すなわち、日本語母語話者は、学習者が使用するほど接続助詞を用いず、他の接続機能をもつ表現で話を展開していると考えられる。しかし、日本語母語話者の平均使用数が超級、上級学習者より顕著に少ないのに対し、発話末の場合は、上、超級学習者に比べてより多く使用されている。発話末すなわち言いさし表現の多用が日本語母語話者の話し言葉における特徴である（柏崎1993：60）とすれば、**図１**より、学習者は習得レベルが上がるにつれて、母語話者の発話スタイルへ接近していく過程が観察できたと言えよう。

図１から、また次のようなことが分かる。

①　発話中、発話末ともに初級から中級、中級から上級へかけての平均数の差は著しい。それに対して上級と超級の間にはそれほど顕著な差がない。

②　言いさし表現の使用に限って言えば、中級から上級までの習得期間をレ

ベルアップしていく一つの段階として仮定することができる。

5. 1. 2　言いさし全体に占める各表現形式の比較

言いさし表現には、様々な形式が含まれるが、学習者は具体的にどの接続助詞で終わる言いさし表現を使用しているのだろうか。またその割合はどのようなものなのだろうか。習得レベルによる差は見られるのだろうか。これらの問いに対する問題点を明らかにするために、言いさし表現に使用される各表現形式の使用数、全体に占める各形式の割合を調べ**表１**にまとめた。

表１　言いさしにおける接続助詞上位使用項目

	初級（n＝15）	中級（n＝30）	上級（n＝30）	超級（n＝15）	母語話者（n＝50）
て	2／40.0%	55／40.4%	47／15.9%	18／10.6%	122／15.3%
けど類[9]	－	33／24.3%	158／53.6%	109／64.1%	417／52.2%
から	2／40.0%	37／27.2%	50／17.0%	15／8.8%	65／8.2%
ので	－	2／1.5%	13／4.4%	19／11.2%	90／11.3%
と	1／20.0%	3／2.2%	3／1.0%	2／1.2%	68／8.5%
し	－	4／3.0%	20／6.8%	6／3.5%	22／2.8%
ば	－	1／0.7%	1／0.3%	1／0.6%	11／1.4%
ながら	－	1／0.7%	2／0.7%	－	3／0.4%
その他	－	－	1／0.3%	－	－
合計／割合	5／100%	136／100%	295／100%	170／100%	798／100%

（四捨五入のため、合計が100%にならない場合もある。以下の表、図においても同様。）

まず、表１の初級学習者に注目してみると、言いさし表現の使用数は５回のみで、中級以上の学習者に比べその使用状況には歴然とした差が見られ、言いさし表現を習得しているとは言いにくいので、以下の考察対象から除外することにする。

中級学習者の場合、使われる使用頻度の多さは「て」、「から」、「けど類」の順になっており、全体の９割（91.9%）を占めている。次いで「し」、「と」、「ので」が用いられるが、その使用は一段と減少し、「ば」、「ながら」の使用はほとんど見られない。「て」、「から」、「けど類」の３形式以外の使用頻度は全体の１割未満（8.1%）である。具体的な使用頻度を見ると、「けど類」、「から」がほぼ同程度使われているのに対し、「て」はこの２形式を大幅に上回っている。このことから、中級では「て」の使用が最も定着し、習得しやすい表現の

一つであると考えられる。

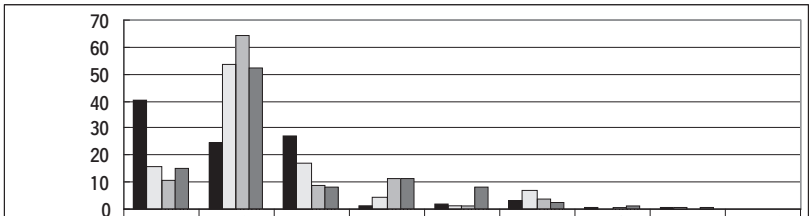
上級学習者は中級学習者に比べ、言いさし表現の使用頻度が急増している。「けど類」、「から」、「て」の使用頻度が高く、加えて「し」、「ので」も使われる。この中でとりわけ中級から上級へ変化を見せているのは「て」、「けど類」である。「て」は中級の40.4％から15.9％へと大幅に減少し、「けど類」は中級の24.3％から53.6％と２倍以上の急増を見せている。上級になると「けど類」は、全体の半分以上の使用頻度を見せている。このことから、「けど類」の使用は、上級レベルに達してはじめて定着すると言える。

超級学習者も上級学習者と同様、「けど類」の使用頻度が最も高い。超級学習者と中級及び上級学習者の相違点としては、「から」の使用数が減るとともに「ので」の使用数が増加していることが挙げられる。超級学習者による「から」、「ので」の使用頻度は日本語母語話者と比べてほとんど変わらない。しかし、「けど類」に関しては、64.1％という高い頻度がみられ、日本語母語話者の52.2％を大幅に上回っている。このことは、日本語母語話者に比べ超級学習者が「けど類」を過剰使用している可能性を示唆していると思われる。

「ので」は、超級になって初めて日本語母語話者とほぼ同程度の使用頻度を示している。このことは何を意味しているのだろうか。インタビューデータを用い、上級日本語学習者の接続表現について日本語母語話者と比較を行った深川（2007：259）によると、日本語母語話者は「ので」を「から」より多く使っていたのに対し、日本語学習者の方は「から」の使用数が多かったという。それは、日本語母語話者の場合は、インタビュアーとの関係が疎であることから、丁寧さを表すために「ので」をより多く使用していたことが原因だという。本稿において、超級学習者による「ので」の使用が日本語母語話者に近い頻度を見せているのは、上級学習者よりも日本語母語話者の発話スタイルに近づく過程の表れであることが予想される。

5．2　課題２　各々の接続助詞の習得順序の検証

以下の図２は、学習者の習得レベル別及び母語話者における各接続助詞の使用率をまとめたものである。



	て	けど類	から	ので	と	し	ば	ながら	その他
■ 中級	40.4	24.3	27.2	1.5	2.2	3	0.7	0.7	0
□ 上級	15.9	53.6	17	4.4	1	6.8	0.3	0.7	0.3
▒ 超級	10.6	64.1	8.8	11.2	1.2	3.5	0.6	0	0
▒ 母語話者	15.3	52.2	8.2	11.3	8.5	2.8	1.4	0.4	0

図２　各接続助詞のレベル別使用率

図２から二通りの傾向が分かる。つまりレベルが上がるにつれ、増加傾向を見せている接続助詞の一群と、反対に減少傾向を見せている接続助詞の一群があるということである。

まず、減少傾向を見せている接続助詞の一群として、「て」、「から」が挙げられる。この２項目はともに中級で高い使用率を見せた後、上級、超級に向けて徐々に減少している。他方、増加傾向を見せている一群として、「けど類」、「ので」が挙げられる。この２項目はともに上級、超級に向け、使用頻度が高くなる傾向が見られる。「と」、「し」、「ば」、「その他」の４項目は、習得レベルの相違により若干の差はあるがそれほど顕著なものではない。

図２の結果は以下の３点にまとめられる。

⑴　「て」、「から」は比較的早い段階の中級からその使用が定着し、会話に使用されやすい傾向がある。

⑵　学習者の習得レベルが上級になって初めて「けど類」の使用頻度が母語話者同様に高くなるということから、上級から「けど類」の使用が定着する傾向があることが窺える。

⑶　「ので」は、超級レベルになって初めて「から」の頻度を上回り、また母語話者とほぼ同程度の頻度を見せている。

以上の考察結果をもとに学習者のレベルによる習得の予測順序を作成してみた。これを**表２**に示す。

表２　予測習得順序

レベル	中級	上級	超級
順序	「て」「から」 →	「けど類」 →	「ので」

表２に示したように、学習者は、まず中級の段階で「て」、「から」の使用が定着し、それから上級になると「けど類」を使用し、超級になってはじめて「ので」が習得されるという順に習得が進んで行くことが推測される。

5．3　課題３－学習者の母語別の比較

ここでは、学習者コーパスを母語別にグループ分けしたもの及び母語話者コーパスを用いて言いさし表現の使用状況を比較分析する。母語別に言いさし表現の使用数、合計に対する各表現の割合を調べ、**表３**にまとめた。

表３　母語別の使用状況と母語話者との比較

母国語	中国語（ｎ＝30）	英語（ｎ＝30）	韓国語（ｎ＝30）	日本語母語話者（ｎ＝50）
項目	使用数／％	使用数／％	使用数／％	使用数／％
て	35／18.4	34／17.9	53／23.9	122／15.3
けど類	93／48.9	97／50.0	110／49.5	417／52.3
から	41／21.6	31／15.9	32／14.4	65／8.1
ので	11／5.8	11／5.7	12／5.4	90／11.3
と	2／1.1	5／2.6	1／0.5	68／8.5
し	5／2.6	14／7.2	11／4.9	22／2.8
その他	3／1.6	2／1.0	3／1.4	14／1.8
合計	190／100％	194／100％	222／100％	798／100％

上の表３より、言いさし表現の全使用数を比較すると、中国語、英語グループはそれぞれ190回、194回とほぼ同程度であるのに対して、韓国語による使用数は222回と大きな差が見られる。韓国語を母語とする学習者は全体的に言いさし表現の使用頻度が高いことが伺える。

また、母語話者に比べ、３グループの共通した特徴として次のことが分かった。

１）「て」で終わる表現は、３グループ共に母語話者を上回っている。

２）「けど類」の使用は母語話者とほぼ同程度である。

3）「から」の使用割合が母語話者を遥かに上回っているのに対し、「ので」の場合、3グループの使用割合には大差がなく、いずれも母語話者の半分程度にしか達していない。

次に、各母語グループの特徴を見ていくことにする。

中国語母語話者の使用状況を見ると、「から」の使用において、韓･英語母語話者の頻度を大きく上回る。特に母語話者と比較すると2倍以上の差が見られる。このことから「から」の多用が中国語母語話者のもっとも大きな特徴であると言えよう。英語母語話者の場合、中・韓母語話者に比べ「し」の使用がより多く、他の項目においてほぼ同程度の使用頻度を見せている。韓国語母語話者は、中・英母語話者に比べ、「て」の使用が多いことが特徴として挙げられる。

5. 3. 1　学習者のレベル別、母語別の比較

ここでは、中級以上の学習者のレベル別、母語別の比較を行うことにする。

表4　中級・上級学習者による使用及び割合

レベル	中級			上級		
母国語	中国語	英語	韓国語	中国語	英語	韓国語
て	16／36.4%	18／40.9%	21／43.8%	12／13.3%	13／12.9%	22／21.2%
けど類	9／20.5%	11／25.0%	13／27.1%	50／55.6%	56／55.4%	52／50%
から	17／38.6%	11／25.0%	9／18.8%	16／17.8%	14／13.9%	20／19.2%
ので	－	－	2／4.2%	4／4.4%	7／6.9%	2／1.9%
と	1／2.3%	1／2.3%	1／2.1%	1／1.1%	2／2.0%	－
し	1／2.3%	2／4.5%	1／2.1%	4／4.4%	9／8.9%	7／6.7%
その他	－	1／2.3%	1／2.1%	3／3.3%	－	1／0.9%
合計／割合	44／100%	44／100%	48／100%	90／100%	101／100%	104／100%

表4をみると、中級レベルの中、英、韓国語母語話者による全体使用数はそれぞれ44回、44回、48回とほとんど差が見られない。また、母語にかかわらず、「て」「けど類」「から」の3つの接続助詞が集中して使われていることが分かる。中国語母語話者は、英語、韓国語母語話者に比べ、「て」「けど類」の使用がやや少ないのに対し、「から」の使用割合は38.6%で、英語の25.0%、韓国語の18.8%より高い割合を見せている。つまり、中級の中国語母語話者は、他の

母語話者よりも「から」を頻繁に使用していることになる。

上級において、まず韓国語母語話者は、他の母語話者よりも「て」をより多く使用し、「ので」の使用が少ない。韓国語母語話者に対し、中国語、英語母語話者はより近い使用傾向を見せている。「て」「けど類」はほぼ同程度、「から」に関しては中国語母語話者が若干上回り、「ので」に関しては英語母語話者が上回っている。英語母語話者は、「ので」の使用において、中国語、韓国語母語話者より高い使用頻度がみられる。

次に、超級学習者のレベル別、母語別の比較を行うことにするが、超級学習者はレベル的に母語話者にもっとも近いことが予想されることから母語話者との比較もかねて考察する。超級学習者及び日本語母語話者による使用状況及び割合の結果を表５に示す。

表５　超級学習者及び日本語母語話者による使用及び割合

母国語	中国語	英語	韓国語	日本語母語話者（ｎ＝50）
て	５／9.3	３／6.3	10／14.7	122／15.3
けど類	34／63.0	30／62.5	45／66.2	417／52.3
から	８／14.8	６／12.5	１／1.5	65／8.1
ので	７／13.0	４／8.3	８／11.8	90／11.3
と	－	２／4.2	－	68／8.5
し	－	３／6.3	３／4.4	22／2.8
その他	－	－	１／1.5	14／1.8
合計／割合	54／100%	48／100%	68／100%	798／100%

表５より、３ヶ国に共通する特徴として、「けど類」の使用頻度（中国語：63.0%、英語：62.5%、韓国語：66.2%）が母語話者（52.3%）を大きく上回ることが観察できる。

韓国語母語話者の「て」、「ので」の使用頻度は（それぞれ14.7%、11.8%）、３ヶ国の中で母語話者の使用頻度（15.3%、11.3%）に最も近い割合を見せている。一方、「から」の使用頻度はわずか1.5%で、中、英語母語話者及び日本語母語話者の使用頻度を大幅に下回る。

5．4　考察－使用頻度にかかわる要因

１）「から」及び「ので」の使用頻度から

学習者の発話において中級レベルから「から」が多用されることについては

上で確認できた。しかし、同じく原因・理由を表すとされる「ので」の使用頻度は、上級になっても中国語、英語、韓国語のいずれのグループも母語話者の半分の頻度にも達していない。

学習者の習得レベルが高くなっても「から」が用いられやすいのは、「から」が他の接続助詞よりも比較的早い段階で学習項目として導入されることにその要因があると推測される。

では、「から」の多用、つまり「から」の使用頻度が高くなることにともなって新たに生じる問題はないのであろうか。これまでのいくつかの研究では、実際の会話における待遇表現としての「から」の持つニュアンスに細心の注意を払う必要があることを指摘している。たとえば峯（1995：74）では、「んだから」は相手を非難するような響きを持ち、さらに白川（2008：７）でも、「から」は「事態を自分勝手に当然視するニュアンスになってしまい、いささか失礼な表現になる」可能性が生じることがあると述べられている。

日本語の会話における「から」または「ので」は、ただ文法的に原因や理由を表すだけでなく、その選択は会話の場面や相手への配慮とも密接に関わり合う待遇表現でもある（谷部1999:153）。つまり上に挙げた峯（1995）、白川（2008）が指摘するように「から」には待遇上の制約が存在し、使用状況と場面によっては相手を非難するような響きを持つことがあり、相手に不快感をもたらし、コミュニケーションの進行を阻害する可能性が出てくることになる。学習者によっては丁寧さを表すために「です」体に「から」を接続する場合もある。しかし、「から」に「です」体を前接しても丁寧さを感じ難いのは「から」の持つ待遇表現としての性質に関連していると思われる（谷部1999：147）。

5．3の表３で確認したように学習者の母語の背景を問わず、「から」の多用が認められた。その中でも、とりわけ中国人学習者が高い使用頻度を見せている。日本語において原因･理由を表す「から」と「ので」は、中国語では「因为（yin wei）」という一つの表現に相当する。中国語の「因为（yin wei）」にはない、日本語の「から」の持つ待遇表現としての談話機能について、学習者が十分に認識していない場合、「から」がその場面に適切でない用法で使用されることが予想される。習得レベルのそれほど高くない学習者には、場面に即して「から」と「ので」を使い分ける能力が備わっていない上に、さらに「から」に関する語用論的な理解不足という背景があり、不適切な発話を引き起こしてしまう可能性が高くなってしまうだろう。

「ので」の使用状況をみると、超級レベルになって初めて「ので」の使用頻度が「から」の使用頻度を上回る。日本語母語話者に比べ、英語母語話者による使用頻度はやや低いとは言え、３ヶ国の母語話者の使用頻度はほぼ変わらな

い。このことは、「から」と「ので」の使用に際して、超級学習者は母語の相違にかかわらずこれらの表現のもつ待遇表現としての性質に配慮し、選択している可能性を示唆するのではないかと考えられる。超級レベルの学習者に対する母語からの影響は一段と弱まり、日本語母語話者に近い運用をするようになると考えられる。しかし、このことは量的分析だけでは簡単に言い切れず、今後さらなる質的考察が要求される。

２）「けど」の使用頻度について

「けど類」の使用頻度が、上級レベル及び超級レベルにおいて母語話者よりも高い割合を示しているということはすでに5．1．2の表１で確認された。そこで予想したように「けど類」の多用は、実際の会話の中で「けど類」が過剰使用されている可能性を示している。

たとえば談話データの中で、「けど類」以外の接続助詞が適切である、または接続助詞が不必要なところに「けど類」が使用されることにより頻度が高くなっていることが予想される。

文末における「けど」の適切な使用は確かに発話を和らげるなど、円滑に会話を進めさせる上で重要な働きを果たしている。しかし使用状況と場面によっては、相手に押しの強さを感じさせたり、相手を問いただすようなニュアンスが含まれ、「かなりきつい調子を帯びた発言になる」（佐藤1994：24）可能性が生じる。したがって、日本語教育の現場では、言いさし表現を導入する場合、それぞれの接続助詞で終わる言いさし表現の機能などを十分に考慮して指導しなければならないと考えられる。

例えば「けど」による言いさし表現は、対人コミュニケーションにおいて積極的な役割を果たす反面、使用状況と場面によっては、円滑な対人関係を阻害してしまう可能性もある表現であることを、文法的な側面に加えて指導するべきであろう。

6．まとめと今後の課題

今回の調査では、学習者コーパスと母語話者コーパスを用い、言いさし表現の使用状況について比較考察を行った。本稿において明らかになったことを以下にまとめる。

①　課題１　習得レベルによる比較

接続助詞が現れた位置の相違に着目すると、学習者は「発話中」、「発話末」ともに、習得レベルが進むにつれ平均使用数は次第に多くなる傾向がある。また学習者は習得レベルに応じて、発話末における平均使用数が母語話者のそれに接近していく過程が観察できた。

中級学習者の場合、「て」、「から」、「けど類」が集中的に用いられ、中級では「て」が比較的早く習得される表現の一つであることが分かった。

上級学習者は「けど類」、「から」、「て」の使用頻度は依然として高いものの、「て」の使用が大幅に減少するとともに「けど類」の頻度が急増している。上級になると「けど類」の使用が定着するものと思われる。

超級学習者による「けど類」の使用頻度は母語話者を大幅に上回り、適切さを欠いた過剰使用が示唆される。超級のレベルになると「から」の使用数が減るとともに「ので」が初めて母語話者とほぼ同程度の使用頻度を示していることから、「ので」の持つ丁寧さを意識しながら使用しているのではないかと考えられる。

②　課題 2　接続助詞の習得順序

レベルが上がるにつれ、「けど類」、「ので」のように増加傾向を見せている接続助詞の一群と、反対に「て」、「から」のように減少傾向を見せている接続助詞の一群があることが確認された。また、習得順序としては、「て」「から」（中級）→「けど類」（上級）→「ので」（超級）の順番に習得が進んで行くことが推測される。

③　課題 3　学習者の母語別の比較

中国語、英語、韓国語と母語は異なっても、言いさし表現の使用に関して普遍性が見られる段階があった。例えば、超級レベルの学習者の場合、母語の相違にかかわらず「けど類」を多用し、「から」の使用頻度が減ると共に、「ので」の使用頻度が日本語母語話者に近い傾向を示したことなどが挙げられる。

母語別にみると、韓国語母語話者は、他の母語話者に比べて全体的に言いさし表現の使用頻度が高く、また「て」の使用が多いことが挙げられる。中国語母語話者の場合、「から」の多用がもっとも大きな特徴である。

今回は、話し言葉コーパスを用い、母語の異なる学習者と日本語母語話者の言いさし表現の使用状況を比較し、量的考察を行った。今後は質的考察を行うことを通して今回の結果についてさらに検証していきたい。

注

1　KYコーパスは、このコーパスの作成者である鎌田修と山内博之のイニシャルから名付けられている。このコーパスには『第二言語としての日本語の習得に関する総合研究』(平成８年度～10年度科学研究費補助金基盤研究（A）⑴課題番号08308019）通称AJプロジェクト（研究代表者カッケンブッシュ寛子）の研究を遂行するために収集した日本語学習者の発話データが収められている。(鎌田2006：43)

2　上村コーパスの原著作権は、北九州市立大学上村隆一氏にあり、「インタビュー形式による日本語会話データベース」(1998) のことを指す。当コーパスは、『平成８－10年度文部省科学研究費補助特定領域研究「人文科学とコンピュータ」公募研究（「日本語会話データベースの構築と談話分析」研究代表者上村隆一）の成果によるものである。

3　OPI(Oral Proficiency Interview)とは、ACTFL(American Council on the Teaching of Foreign Languages) によって開発された口頭能力面接試験のことをさす。最長30分という限られた時間内でインタビューを行い、それをACTFL外国語能力基準に照らし合わせ、被験者の口頭能力を判定する評価法である。（鎌田2006：45)

4　これまでは「省略文」、「中途終了型発話」、「中途終了文」、「中断文」、「接続助詞の文末用法」「終助詞的用法」などの様々な用語が用いられていた。本研究では、先行研究においてより多く使用されている「言いさし表現」という用語を用いて論を進めることにする。

5　http://www.env.kitakyu-u.ac.jp/corpus/を参照されたい。このコーパスは会話モードとロールプレイモードの両方からなり、会話能力の判定ではなく、多くの発話サンプルを採集することが目的となっている。また上村コーパスには、10代から60代までの大学生、大学教職員、日本語教師、主婦、会社員などに対して行ったインタビューデータが収録されている。会話モードでは、被験者が大学生の場合は名前、専攻分野、将来の仕事について、社会人の被験者の場合は、名前、仕事、住居などについて応答を行った。ロールプレイは、ごみの捨て方、映画／旅行の誘い、友人との約束の変更、アルバイトの面接の４種類の場面設定で行った。

6　E-KWICはエクセルファイル形式になっており、エクセルのマクロを実行するだけで検索ウィンドウが表示され、検索を実行することが出来る。このツールはデータフォルダ内のすべてのファイルに対して、①語彙の原型

による一括検索、②語彙と品詞の組み合わせによる検索、③品詞のみの検索、④意味クラスのみの検索ができる。さらにオプションを選択することで、①正誤の選択、②学習者レベルの選択、③学習者の母語の選択というように検索対象を限定することができる。

7 「茶筌」は奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科自然言語処理講座（松本裕治研究室）で開発された日本語形態素解析ツールの一種である。単語（形態素）の分割、基本形や品詞、活用情報の提示といった、コーパスに基づいた日本語研究を行ううえで重要な情報を提示してくれる有用なツールである。
詳細はhttp://chasen.naist.jp/hiki/ChaSen/を参照されたい。本稿では名古屋大学国際開発研究科の大名力氏のhttp://dicom1.gsid.nagoya-u.ac.jp/~ohna/chasen/に文字データを入力し形態素解析を行った。

8 形態素解析の結果をすべて手作業で確認し、修正が必要な箇所は手作業で修正作業を行った。会話文のような非規範的なテキストデータを解析した場合、その解析精度には、解析誤りの問題が存在する。たとえば接続詞の「だから」を「だ」と「から」の二語に解析し、「から」は接続助詞として解析されてしまうことがある。

9 「けど類」には、「が」、「けど」「けれど」「けども」「けれども」が含まれる。これらの接続助詞で終わる文には丁寧さ等待遇的な違いがあることは認められるが、意味的には近いものであると考えられる。発話資料に「けど」で終わる文の使用頻度が一番高かったため、「けど類」で表記を統一することにする。

参考文献

池田　裕（1995）「文末表現の重要性」，『月刊言語』，Vol.24No.13，128－129

石川　智（2005）「文末表現「けど」のポライトネス－OPIから見た母語話者と学習者の使用状況」，鎌田修他編『言語教育の新展開－牧野成一教授古稀記念論集』，349－364，ひつじ書房

岡田安代（1991）「日本人はなぜ文末まで言わないのか？－会話を成り立たせる「共話」の原理－」，『月刊日本語』，Vol.4No.1，9－13

柏崎秀子（1993）「話しかけ行動の談話分析－依頼・要求表現の実際を中心に」『日本語教育』，79，53－63

鎌田　修（2006）「KYコーパスと日本語教育」，『日本語教育』，130，42－51

小林ミナ（2005）「コミュニケーションに役立つ日本語教育文法」，野田尚史編『コミュニケーションのための日本語教育文法』，23－42，くろしお出版
佐藤勢紀子（1994）「中上級日本語教育における中断文「…が／けど」の扱い方」『東北大学留学生センター紀要』，2，17－26
峯布由紀（1995）「日本語学習者の会話における文末表現の習得過程に関する研究」，『日本語教育』，86，65－75
鮫島重喜（1998）「コミュニケーションタスクにおける日本語学習者の定型表現・文末表現の習得過程－中国語話者の「依頼」「断り」「謝罪」の場合」，『日本語教育』，98，73－84
白川博之（2008a）「「言いさし文」の談話機能」，串田秀也・定延利之・伝康晴編『「単位」としての文と発話』，1－25，ひつじ書房
――――（2008ｂ）「文型としての「言いさし文」」，『広島大学日本語教育研究』18，1－8
高田恭子・福盛寿賀子（2002）「非言い切り文の考察－教科書分析と「が・けど」文末の使用実態から」，『九州大学留学生センター紀要』，12，43－54
陳　文敏（2000）「日本語母語話者の会話に見られる「中途終了型」発話－表現形式及びその生起の理由」，『言葉と文化』，1，125－141
泉子・K・メイナード（1992）『会話分析』，くろしお出版
深川美帆（2007）「接続表現から見た上級日本語学習者の談話の特徴－日本語母語話者と比較して」，『言葉と文化』，8，253－268
水谷信子（2001）『続日英比較　話しことばの文法』，くろしお出版
谷部弘子（1999）「「のっけちゃうからね」から「申しておりますので」まで」，現代日本語研究会編『女性のことば・職場編』，139－154，ひつじ書房